

名曲でめぐる世界への旅 アメリカ～ブラジル～イギリス ～ポーランド～フィンランド

プログラム

長い歴史の中で、様々な国の作曲家によってクラシック音楽の名曲が生まれて行きました。今日は世界をめぐりながら名曲の旅へのご案内します。

ヨーロッパ諸国の歴史に比べ、アメリカの音楽史は比較的新しく、教会の賛美歌や民俗音楽、ジャズを融合させたシンフォニック・ジャズなど、独自のスタイルで発展して行きました。最初はアメリカを代表する作曲家のひとりコープランドの名曲「エル・サロン・メヒコ」をアメリカ出身の名指揮者ジンマンとボルティモア交響楽団によるお国物の演奏で旅の始まりです。南米へ飛んでブラジルの大家ヴィラ＝ロボスの代表作「ブラジル風バッハ」からは第5番のアリアを名ソプラノオジエーと小澤によるベルリン・フィル創立100周年記念コンサートでの演奏でお聴きいただき、イギリスへ。近代イギリス音楽の父とも呼ばれるエルガーの名曲チェロ協奏曲は名手ヨーヨー・マとこの曲の良き理解者である名指揮者バレンボイムの演奏です。後半はポーランドに飛んでショパンの最も良く知られた名曲を3曲。夜想曲第2番はピアノ界の詩人とも言うべき名手カツァリスの演奏、幻想即興曲は名ピアニストニコライエワ(1924～1993)による味わい深い演奏で、英雄ポロネーズは巨匠ポリーニの堂々たる演奏でお聴きいただきます。最後はフィンランドに向かい北欧の巨人シベリウスの名作交響曲第5番です。チェリビダツク(1912～1996)とミュンヘン・フィルによる圧巻の名演奏で締めくくりたいと思います。ごゆっくりお楽しみください。(中川)

アーロン・コープランド(1900～1990):

エル・サロン・メヒコ

デイヴィット・ジンマン指揮ボルティモア交響楽団
(1994.11.11 サントリーホールでのLive)

エイトル・ヴィラ＝ロボス(1887～1959)

ブラジル風バッハ第5番－アリア

アーリーン・オジエー(sop)／小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1982.5.7 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

エドワード・エルガー(1857～1934):

チェロ協奏曲ホ短調Op.85

ヨーヨー・マ(Vc)／ダニエル・バレンボイム指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1990.5.23 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

*** 休憩 ***

フレデリック・ショパン(1810～1849):

夜想曲第2番変ホ長調Op.9-2

シブリアン・カツァリス(P)
(1994.7.21 オシアツハ、シユティフツ教会 「ケルンテンの夏」音楽祭でのLive)

即興曲第4番嬰ハ短調「幻想即興曲」Op.66

タチアナ・ニコライエワ(P)
(1993.7.1 昭和女子大学人見記念講堂でのLive)

ポロネーズ第6番変イ長調「英雄」Op.53

マウリツィオ・ポリーニ(P)
(1986.8.24 サルツブルク祝祭大劇場 サルツブルク音楽祭でのLive)

ジャン・シベリウス(1865～1957):

交響曲第5番変ホ長調Op.82

セルジユ・チェリビダツク指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団
(1988.3.26 ミュンヘン、ガスタイクホールでのLive)

曲目解説

コーブラント：エル・サロン・メヒコ

ニューヨーク、ブルックリン生まれのアーロン・コーブラントは20世紀アメリカを代表する作曲家で、1921年パリに留学し、ナディア・ブーランジェに師事。帰国後はアメリカ民謡やジャズの手法を取り入れ、大衆に愛される明快で分かりやすい作品を数多く作曲しました。エル・サロン・メヒコは1932年の秋にコーブラントがメキシコを訪れた時に出会った有名なダンス・ホール「エル・サロン・メヒコ」のエキゾチックな雰囲気とメキシコの民族音楽に魅了され、1933年この時の印象をもとに着手、1936年に完成しました。初演は1937年8月27日にメキシコ・シテイで、カルロス・チャベス指揮メキシコ国立交響楽団によって行われました。曲は随所に民謡を取り入れた3つの部分に分かれ、穏やかな中間部を挟んで複雑なリズムが絡み合う熱狂的な音楽が展開されます。コーブラントの代表的な名曲のひとつです。

ヴィラ＝ロボス：ブラジル風バッサ第5番

ブラジル、リオデジャネイロ生まれのヴィラ＝ロボスは、アマチュア音楽家の父から音楽を学び、ピアノやギターの演奏に優れた腕前を発揮しました。作曲の勉強をする傍ら民謡の採取を始め、1907年国立音楽研究所に入り、本格的な研究を始めるとブラジル音楽の特異な性格ふれ、自らの作品に民族的な個性を出すようになります。1923年パリに留学、ロンドン、ウィーン、ベルリン等を訪れた際に受けた新古典主義音楽の影響がヴィラ＝ロボス独自の作風を作り上げた要因にもなっています。「ブラジル風バッサ」は1930年から1945年に作曲された9つからなる曲集で、楽器編成や演奏形態もそれぞれ異なっています。今日では日本語に訳さず、「バックアーナス・ブラジレイラス」と呼ばれる事もあります。第5番は特によく知られた名曲で、**アリア**と**踊り**の2曲からなっています。

エルガー：チェロ協奏曲ホ短調作品85

ヘンリー・パーセル（1659～1695）以来続いていた、イギリス作曲界の空白を埋めた大作曲家が1857年生まれのエルガーでした。エルガーは交響曲、管弦楽曲、協奏曲等に多くの名曲を残しましたが、唯一のチェロ協奏曲は第一次大戦直後の1918年冬に作曲に着手し1919年8月に完成、同年10月26日ロンドンのクイーンズ・ホールで、フェリックス・サルモンドのチェロとエルガー自身の指揮ロンドン交響楽団によって初演されました。リハーサル不足だったこともあり、初演は芳しい評価ではありませんでしたがベアトリス・ハリソンがチェロを務めた再演で好評を博し、その後不世出の天才チェリスト、ジャクリーヌ・デュ・プレが積極的に愛奏した事で、この曲の評価は決定的なものとなりました。今日ではドヴォルザークやシューマンと並ぶチェロ協奏曲の傑作として愛されています。チェロという楽器の特質が最大限に生かされた詩情あふれる哀感は、魅力にあふれています。

第1楽章 アダージョーモデラート 第2楽章 レントーアレグロ・モルト
第3楽章 アダージョ 第4楽章 アレグロ

ショパン：夜想曲第2番変ホ長調作品9の2

ショパン：即興曲第4番嬰ハ短調作品66「幻想即興曲」

ショパン：ポロネーズ第6番変イ長調作品53「英雄」

6歳のときからピアノを習い始め、8歳のときにはすでに神童としての名声を博していたショパンは、生涯をピアノ音楽に捧げ、ピアノの表現形式を拡大しました。夜想曲はジョン・フィールドが先駆者とされますが、ショパンはまったく新しい形式を生み出しました。第2番は1831年の作で、甘美なメロディで人気がありヴァイオリンチェロにも編曲され親しまれています。即興曲は心の中にひらめいたなにげない楽想を、自由かつ正確な書法で作曲した小品を言います。4曲ある即興曲のうち**幻想即興曲**は1834年に書かれています。ショパンの死後発見されたため第4番となっています。幻想的なやるせない悲しさと優しさが交錯する名曲。**ポロネーズ第6番**は療養のために渡ったマジヨルカ島から帰った1842年の作で、「英雄」というタイトルの由来は不明ですが、強壮なリズムと雄大で輝かしい曲想は「英雄」と呼ぶにふさわしい内容を持っています。ショパン円熟期を代表する名曲です。

シベリウス：交響曲第5番変ホ長調作品82

北欧フィンランドの巨人シベリウスは生涯番号付きの交響曲を7曲残しました。第5番は1915年に書かれたのですが、この頃シベリウスはすでに国民的な作曲家となっていて、彼の生誕50年を祝う12月8日の国家的祝賀行事のために作曲されたのでした。有名な第2番のあと第3番、第4番と通向きの内面化傾向にあった作風が、この第5番では再びのびやかに自然の雰囲気や漂わせた作風に戻り、聴衆は熱狂しました。この大成功にもかかわらずシベリウスは満足せず、1916年と1919年に改訂を行いました。今日演奏されているのは1919年の第2改訂版によるものです。シベリウスの交響曲を代表する傑作。

第1楽章 テンポ・モルト・モデラート 第2楽章 アンダンテ・モッソ・クワジ・アレグレット
第3楽章 アレグロ・モルト